

澤井努著

『命をどこまで操作してよいか—応用倫理学講義—』(慶應義塾大学出版会、2021年)

おやさと研究所教授

金子 昭 Akira Kaneko

F. フクヤマは『人間の終わり』の中でこんな問いかけを紹介している。あなたが無人島で2種類の生物に出会ったとする。どちらも人間の能力があって会話も可能だ。一方はライオンの姿で人間の感情を持ち、もう一方は人間の外見だが感情はライオンそのもの。あなたが友達になりたい、道徳的関係を結びたいと思うのはどちらだろうか。

きっとだれもが同じ答をするだろう。人間の感情を持ったライオンのほうだ、と。フクヤマは人間らしさとは何かという議論の中でこれを紹介している。今まではおとぎ話かSFの世界の出来事として済んでいたことが、そう遠くない将来実現するかもしれない。つまり、ヒト化した脳を持つ一種のキメラ動物の作製である。このような奇怪な生物はそもそも動物なのか人間なのか。ポイントはあなたがこの生物と道徳的関係を結びたいかどうか、というところにある。そうした関係は、この生物もまた我々人間と同じような道徳的地位を持つかどうかにかかっている。

では、道徳的地位とは一体何なのか。我々は通常、道徳的地位を持つ存在をそのまま生物学上のホモサピエンスと同定した上で人権問題を議論しているが、生命科学の進歩は、動物にも人間らしさの生物学的基盤を作り出すかもしれない。それが可能だとしても、それはどこまで許されるのか? いや、そもそもそんなことをしても良いのだろうか? 人間であること、また人間であることと条件とは一体何なのか?

最先端の生命倫理は、人間存在の根本にかかわる問いをこんな形で提起することになる。それだけ人間の生命にかかわるテクノロジーが進歩してきているのだ。従来型の倫理の枠組みではもはや追いつかない。生命倫理の最先端に立とうとすれば、生命科学の最前線を常にキャッチアップしている必要がある。と同時に、それが倫理の問題である以上、人間として生きる/行動する筋道としての倫理の議論にも精通していなければならない。

澤井努氏の原著『命をどこまで操作してよいか』は、まさにこの困難な二正面作戦に挑んだ優れた生命倫理の著作だ。それは、澤井氏自身が本書序文で提示した二つの新しさに明確に打ち出されている。その第一は科学と倫理の最前線で議論する点であり、第二は道徳的地位という考え方を導入する点である。

科学は未知のものを既知へと持ち、技術は不可能なことを可能にする。今日の生命科学技術^{バイオテクノロジー}を駆使すれば、人間や動物の命をいくらかでも操作することができる。しかし、そうした命の操作はどこまで容認できるものなのか。この問題を扱う領域が不可欠である。それが生命倫理^{バイオエシックス}である。そして生命倫理には一定の原則なりルールが必要だ。

澤井氏は第1章において、まず自らの生命倫理の立脚点を道徳的地位の導入に置き、そのための諸原則について検討する。M. A. ウォレンの所論に依拠しつつ、澤井氏は道徳的地位の7つの原則を挙げている。すなわち、①生命を尊重する原則、②残酷な行為を禁止する原則、③道徳的行為者の権利を尊重する原則、④人権を尊重する原則、⑤生態系や生態系にとって重要な存在者を配慮する原則、⑥社会的共同体に属す、人以外の動物を尊重する原則、⑦尊重を推移させる原則の7つである。これらの諸原則を生命倫理の諸領域において適宜取捨選択して適用する

ことで、先端科学技術が提起する問題を議論していく。

これが本書の基本路線である。この基本路線に基づき、以下の4つの章(カッコ内はそこで論じられる主な問題)で個別の生命倫理の領域が詳細に検討される。第2章ではヒト化する動物をめぐる倫理について(キメラ動物でヒトの組織・臓器をつくること)、第3章

では人の発生をめぐる倫理について(体外培養などで胚や各種臓器を作製すること)、第4章では生殖をめぐる倫理について(親の利害やまだ存在しない未来世代の利害、自然な生殖とは何か)、そして第5章では未来世代をめぐる倫理(ゲノム編集により子供の遺伝子操作を行うこと)である。

最先端の生命科学研究や最新の英米系生命倫理の理論を紹介しながら、これらの検討がなされるので、評者としても大変勉強になった。例えば、脳オルガノイド(第3章参照)、すなわち三次元培養技術で作製される脳(の臓器様のもの=オルガノイド)の問題がそうである。2008年に日本の研究グループが、すでにヒトのES細胞から三次元の大脳組織の誘導に成功した。最近では、脳オルガノイドから新生児の脳波に似た波形が検出されたという。まさに生命倫理問題が満載された事例だ。現実がそこまで来た以上、これからは脳オルガノイドが有感性や認知能力を持つことを想定し、その利害や福祉も検討しなければならないことになる! そこで澤井氏は、脳オルガノイドの道徳的地位を確定する際、上記の7原則から4つ(②、③、④、⑦)を取り出し、これらを適用しつつ、今後の脳オルガノイド研究を進めていくべきだと述べるのである。

本書の終章は「生命倫理の議論はどうあるべきか」と題される。ここで提示された3つの課題は、道徳的地位7原則の優先順位の確定問題、各章で取り上げられた批判的論拠の一層の検討問題、そして市民による議論の参加による社会的合意形成の問題である。紙幅の関係で触れられないが、それらについての澤井氏の提案は、なるほどどうなずかされるものがある。

本書から学ぶところは数多くあり、生命倫理の最前線について知るための必読書の一つである。また副題に「応用倫理学講義」とあるように、大学等の応用倫理学のテキストにも最適である。応用倫理学の諸分野の中にあっても最も専門分化し、議論も高度化・精緻化しているのが生命倫理(学)の分野である。しかしこの分野こそ、命の問題を扱うゆえに、我々にとって最も身近でかつ切実な倫理的テーマなのだ。命をめぐる問題だからこそ、いわゆる専門家たちだけでなく、だれもが様々な角度や立場から生命倫理の議論に参画していくことを期待したい。

